

徒然草「鼎」の段を読む

川平 敏文

前回私は、「猫また」の段における江戸時代の注釈を参考に、そこから説教者としての兼好の姿を夢想した。徒然草はいわば「説教的コンテキスト」の中で語られているものであり、何の変哲もないように見えるただの笑い話ではあっても、その背後には、必要に応じていつでもそれを教訓に転化しうるような「構え」が用意されている、という説である。今回は特に第五三段の話を中心に取り上げながら、もう少しこの問題について話してみたいと思う。

一 鼎が抜けず大騒ぎ

徒然草・第五三段は、座興で被った鼎(次頁図版参照)が抜けなくなり、あやうく命を失うところであったという、おっちょこちょいな法師の話。高等学校の教科書や副読本でも有名な段だ。

今ではとんと見かけなくなつたが、筆者が小さい頃には、近所の駄菓子屋に、瓶入りのコーラとかスプライトとかが必ず置いてあつた。そしてそれらを店頭で豪快にラッパ飲みし、友だちと何やらしゃべっているうちに、人差し指を飲み口につっこんでしまい、さて抜かんとするに抜けずに冷や汗をかいた、などということが再三あつた。

まあジュースの瓶くらいであれば、最終的には割つてしまえばそれでよいかもしれないが、公園などで一人遊びをしているとき、遊具の穴で同様のことが起こつた場合など、下半身がむずむずするような、本当になんともいえない焦燥感があつて、いまこうして思い出ただけでも、当時の自分が可哀想に思えてしまう。そういう事態の最悪のケースが、今から述べる話だ。

舞台は京都の仁和寺。稚児(寺院に仕える子ども)が成人して剃髪し、「法師」になるその記念というので、先輩法師たちが酒宴を開いた。そこで、ある法師が酔っぱらい、興に入るあまり、そばにあつた鼎をとつて無理やり頭をねじ込み、舞い始めた。その姿がなんとも可笑しくて、座は大いに盛り上がった。

ところが、しばらくして鼎を抜こうとすると、全く抜けない。始めは面白がつて見ていた周囲の人々も、だんだん血の気が引き始め、「酒宴ことさめて、いかがはせんとま



【徒然草絵抄】より（部分）

どひけり」。みんなで力を入れて引き抜こうとすると、首の廻りが赤く擦れて、そこから血が垂れ、そのうちどんどん腫れてくる。呼吸も困難な様子であるから、いっそ鼎を叩いて割ってしまおうとするのだけれど、金属だから簡単には割れない。また当の法師も、その叩きつける音が直接耳に響いて、とてもではないが堪え難いらしく、「止めてくれ！」というそぶり。そのあとのくだりを、少しだけ原文で読んでみよう。

すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子かたびらをうち掛けみつあして、手をひき、杖をつかせて、京なる医師のがり（＝

医師のもとへ）率みて行きける、道すがら、人の怪しみ見る事限りなし。医師のもとにさし入りて、向ひぬたりけんありさま、さこそ異様ことやうなりけぬ。物を言ふも、くゞもり声に響きて聞えず。「かゝることは、文（＝医学書）にも見えず、伝へたる教へもなし」と言へば、また、仁和寺へ帰りて、親しき者、老いたる母など、枕上まくらがたに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覚ええず。

布を頭から被らされて、おずおずと手を引かれていく様子、医師が「こんな場合の対処法は、ものの本には書いてない」と文字通り匙さじを投げる様子など、いずれも現代のコメントを見ているかのようなだ。

さて、このどうしようもない状況を展開すべく、ある者が言った。たとえ耳や鼻が切れ失せても、命だけは助かるに違いない、「ただ力を立てて引き給へ」。そこで藁しべを鼎と首の間に差し込み、鼎が直接肌に触れないようにして、首もちぎれるほどに引き抜いたところ、耳と鼻はちぎれてしまったが、どうにか鼎は抜けた。辛うじて一命を取りとめ、久しく病んでいたということだ――。

この話を一読して、現代の読者はどのような感想を持つだろうか。高校生などに聞いてみると、まず出されるのはやはりその「滑稽味」であり、またその結末がやや「残酷」

だということである。どちらがウエイトが高いかと聞けば、たいていは「滑稽味」であると答える。では、江戸時代の徒然草注釈はこの章段にどのようなコメントを付けるであろうか。

まず松永貞徳の『慰草』（慶安五年（一六五二）刊）は次のように言う。

此段にて兼好の慈悲あらはれたり。此本見ぬ所のものなど、かやうのあやまちをしつべき事なれば、此段ばかりは書きぬきても、あまねく後世にしらせたき事也。つまり、ゆめゆめこんな馬鹿な真似をしないようにという後世人への慈悲心から、兼好はこの段を書いたのだという。だから、この段だけでも抜き書いて長く後代に伝えたいものだ、と貞徳は言う。これはもう完全に教訓的な理解である。

もう一例、浅香久敬の『徒然草諸抄大成』（貞享五年（一六八八）刊）を見ると、

この段は、前の段で仁和寺の僧が先達を求めず、独りよがりのために失敗した話を受けて、いにしえの貴い僧侶たちの戒めを守らずに酒宴遊興したからこそ、このような身体的障害を負ってしまったのだと、後の人をいませめたものだ。（現代語で要約）

と、これも貞徳とほぼ同断の見解が見える。引用文の前半

に、前段とのつながりを指摘している点は重要なので、ちよつと覚えておいていただきたい。

江戸時代の徒然草注釈はだいたいこの調子なのであるが、ついでに明治期の小中村（池辺）義象『標註徒然草読本』（明治二十三年刊）あたりも見えておけば、「この段、興を好て軽躁に陥る弊を論ず」と簡単に書かれてあって、やはり江戸の教訓的理解の延長にあることが分かる。すなわち、明治も二十年代頃まではおしなべて、この段の「滑稽」はどこにも指摘されないのである。

この段に滑稽を指摘した比較的早い例は、依田学海の『徒然草評釈』（明治二十年代刊）あたりではなからうか。先に引用した、「鼎」を医者に関連して行く場面の、「道すがら、人の怪しみ見る事限りなし」以下の一文について、

此句、また警句にて、滑稽の妙を見る。尤も必要の句なり。凡、滑稽の文に、殊更にをかしく思はせんとして、文を舞はしたるは、かへりてをかしからず。じほう（マツ）にかき流したるかた、おのづからなる滑稽となる。此文中に「鼻をおしひらめ」、又「医師のもとにて対ひ居たりけむ」などいふ所は、ただありのままなれども、これをおもへば、腹筋のよれるばかりにをかし。

と言う。学海は、ことさらに笑わせようとするのではなく、さらりと書き流したところに、この段の「腹筋のよれるば

かり」なる滑稽味が見出せるという。

また、内海月杖の『徒然草評釈』（明治四十四年刊）は、「法師のばかあそびを咎めた意味も、多少はあらうが、まあ、滑稽の趣を見せたのが、この文の主題だ」、つまり教訓よりも滑稽の描写が、この段を執筆した兼好の本意であったとし、

その勿体ぶった医者と、三足の鼎をかぶった看者とが、——おまけに、それが法衣ころもを着て、——今、相對座して、お互にとりすましてゐる、後の方には、心配な顔をしたつき添の人々がひかへゐるのだ。さあ、その滑稽のさまつたら、なからうではないか。それが、いかにもよくでてゐるのだ。

その次の「かかることは書にも見えず、伝へたる教もなし」といふのは、更にうまい。この一句が、この文の滑稽趣味の頂点だ。（後略）

と、その滑稽の在りどころを解説する。全く同感である。そして現代の注釈の代表、久保田淳『徒然草評釈』（『国文学』三四—二、平成元年二月号）でも、「『此段にて兼好の慈悲心あらはれたり…』という貞徳の実利的な受け留め方にはいささか辟易する」とある。「辟易」は「ヘキエキ」と読む。あきれるということ。

江戸と近代との間には、このように大きな溝が横たわつ

ている。

二 俗文芸の中の「鼎」

では江戸人は、この話を全く「滑稽」だと思わなかったのか。そんなことはない。俳諧や川柳、絵画などを見れば、これが明らかに「笑い」の対象だったことが分かるのである。

たとえば元禄期に活躍した井原西鶴。彼は浮世草子作者として著名であるが、その文事の本筋は俳諧であった。次に見るのは、彼の独吟連句（ひとりで五七五・七七・五七五…と句を連ねた作品）の、ある一部分を抜き出したものである。（B）の句がその中心となるのであるが、前句（A）と付句（C）とともに、いわゆる「三句の渡り」をいささか解説しよう。

(A) 春のはじめの興のさめ肌

(B) 屠蘇酒とそに酔狂あいぐるしてあしがなへ

(C) 野辺にもえ出る草双紙くさふたじよむ

（『西鶴俳諧大句数』第四、延宝九年刊）

まず前句（A）から。春のはじめに、鮫肌（ざらざらした皮膚）のように興がさめてしまった、というのがその意。それを受けて（B）は、春の始めになぜ興がさめたの

かといえば、正月に酔狂で鼎をかぶったはいいが、それが取れなくなったからだ、と付けた。これが徒然草の一場面であることは、当時の人ならば皆、分かったであろう。「酔狂」「鼎」とくれば、すぐにこの段が連想されるわけである。さらにその付句（C）は、今度は場面を書斎などに移し、春の野辺に新緑が萌え出でる頃に、（B）の話が載った草双紙——徒然草そのものとも考えられる——を読む人がある、という情景へと展開させた。

ちなみに、徒然草・第四三段に、「春の暮れつかた」、兼好がある家に立ち寄り、「かたち清げなる男の、年廿はたちばかりにて、うちとけたれど、心にくく、のどやかなるさまして、机のうえに文をくりひろげて見ぬた」るのを覗いた、という段がある。（C）の句は、（B）の徒然草からの連想で、かような美少年の読書の場面を、西鶴は想像していたのではなからうか。

また江戸中期の代表的俳人である与謝蕪村の、

春やむかし頭巾づきんの下の鼎なべさす

という発句は、その昔、例の騒動で耳と鼻とを無くしてしまつた法師が、いまは人目を憚り、頭巾を被つて歩いていくという、法師の「その後」を詠んだもの。滑稽の中にも哀感が漂う作品である。

川柳にも面白いものが多い。すでに島内裕子氏が『徒然草の変貌』（一五六頁）に紹介しているものも含めて、いくつか列挙してみよう。

仁和寺の障子にうつる角大師かくだいいし

医者へゆく鼎を犬がやたら吠え

仁和寺の化ばけもの脈をみてもらい

容体を言へば鼎はうなづきて

など。最初の句の「角大師」とは、天台宗の高僧・元三がんざんだい大師だいしこと良源の厳めしい風貌を象かたどつたという、二本の触覚のような角がある黒鬼を指す（これは刷り物などに描かれて、魔除けとして使われた）。鼎を被つた法師の影が障子に映っているさまを詠んだのである。

あとは特に注解も要さぬであろう。要するに俳諧や川柳で「鼎」といえば、江戸人の常識としては、普段使っている生活用具としての「鼎」ではなく、この徒然草の「鼎」がすぐに連想されるわけである。

こうして見れば、江戸人は決して、この話を教訓としてばかり、しかつめらしく考えていたわけではないことが分かる。江戸人にとつても、この話は十分に滑稽だったはずなのである。

三 教訓と滑稽

ならば、どうして江戸時代の徒然草注釈家たちは、滑稽であることを指摘せず、上に見たような教訓的な読みに終始するのか。これは当時の正統な「文学」とは何かを考える上で、重要な問題である。

「鼎」の段の注釈における、近代とそれ以前の「読み」を分かつその理由は、江戸人と近代人の徒然草に対する読み方の姿勢が、そもそも違っているということだ。では、どう違うのか。

私たちは徒然草を章段ごとに区切って、それらを独立・完結した一箇の短編として読んでしまいがちである。が、実は、それは危ない見方である。徒然草の章段番号というもの、後世の人がつけたものであり、古写本類には、このような番号は振られていない。もともと、現行の章段区分に近い形で、ある程度の段落をつけた本は存在するけれども、それさえ、兼好がもともとつけた段落だったかは不明である。なにしろ、兼好自筆の徒然草など残っていないのだから。

とするならば、徒然草はある程度、章段間の連続性を想定した上で読まなければ、兼好の真意がどこにあるかを定位置できないということになる。このような「読み」の考え

方は、古く江戸前期の加藤馨齋が強く主張したものであったが、馨齋ほど厳密ではないにしろ、江戸期の注釈はおおむねその傾向を有していた。この「鼎」の段はどうだろうか。

「鼎」の段の二段前、第五一段はこうである。——龜山殿という御所の池に大井川の水を取り込もうとして、その周辺の人々に水車を作らせた。多額の給金を出して、数日間をかけて出来上がったのであるが、どうやってもうまく回転しない。そこで水車が多いことで知られる宇治の住民を召し寄せて、水車を作らせたなら、うまく回転して見事に水をくみ上げた。

「万よろに、その道を知れる者は、やんごとなきものなり」。これが、この段の最後に兼好が付けたコメントである。「なんにつけても、その道を心得ているというのは尊いもの」というのだ。そうして、これも教科書ではおなじみ、第五二段「石清水」の法師の段に続く。

仁和寺の法師が、長年の宿願であった石清水八幡宮詣で行くといって、供も連れずひとり徒歩で出発した。しかしこの法師、山上に鎮座する本社は見えないで、山麓の寺院のみを見て帰って来た。さて友人に向かって言うには、「思った通りの素晴らしい御社でした。それにしても、皆が山上の方へ上っていくのは、どういう訳でしょうか」。

この段の最後は、「少しのことにも、先達はあらまほし

き事なり」と締めくくられる。「ちよつとしたことでも、先達はあつてほしいものです」と言うのであるが、よく見れば、これは前の章段のシメの言葉と、その主題が非常によく似ていることに気づく。二文を並べてみるとこうなる。傍線や波線がその対応箇所である。

万に、その道を知れる者は、やんごとなきものなり。(五二段)

少しのことにも、先達は、あらまほしき事なり。(五三段)

つまりこの二つの章段は、話の内容自体は全く異なるものなのだが、それを底辺で支える主題は同じような構造をしているのである。

では、この「石清水」の段と次の「鼎」の段はどう繋がっているのか。「鼎」の話には、前二段のような締め括りの教訓的な言葉は書かれていない。が、兼好の意識の連続性を重視して、ここにも教訓的な主題がゼロ記号として伏在していると考えるのが、江戸の注釈者流である。加藤馨齋『徒然草抄』(寛文元年(一六六一)刊)は次のように言う。

此段は、自知をもつてしそこなひたるためしなり。先達のおきてを問ひてしたがはぬ失を云り。

すなわち、「石清水」の段の、先達を求めなかったために失敗したという話を受けて、同じ仁和寺つながりで、別の

類話を出したものと見るのである。

あるいは、前の段とではなく、その次の段との関係において考える注釈もあった。なぜなら次の段もまた、同じ「仁和寺の法師」の失敗談だからだ。第五四段の内容を簡単に記そう。

仁和寺に非常に美しい稚児がいた。何人かの法師が、風流かつ美味なる弁当を作つて、あらかじめ双ヶ丘(仁和寺近くの丘陵)に埋めておき、しばらくしてこの稚児を誘い出した。そうして法師たちが、あたかもその念力によつて弁当を取り出したかのように、さまざまに芝居をうつて稚児をびつくりさせようとしたところ、肝心の弁当が出てこない。埋めているところを誰かが見ていて、こつそり盗んでしまつていたのだ。

「あまりに興あらんとする事は、必ずあいなきものなり」。これが本段のシメの言葉である。そしてこれは、

此段、前段と同じ意なり。「あまりに興あらん」といへる一句にてよくきこゆるなり。

(『徒然草諸抄大成』)

というように、前段においてゼロ記号として伏流していた主題が、ここで浮上したものと考えるのである。

いずれにしろ、第五一段から五四段の末尾には基本的に、話をきゅつと収斂させる、このような教訓的な主題がたし

かに存在しているのであって、そうした話の流れ、および主題の存在を重視したのが江戸の「読み」であった。彼らは、表面的な滑稽は言わずもがなのこととしてさておき、その核心の部分をしつかりと評価すればよいと考えたわけである。

近代も大正頃に近づく、「文学」の評価軸は大きく揺れ動く。剥き出しの教訓が文学の価値としてはむしろ低く見られるようになったこと、周知の通りである。ことに各章段の配列が解体され、それぞれに独立した短編作品のように読まれ始めた近代の徒然草解釈においてはなおさら、そのような「行間」ならぬ「章段間」の流れ、あるいはそこにゼロ記号として隠れている主題の存在が、見えなくなってしまう。そのため、より表面的な部分、滑稽ばかりに評価の比重が移ってしまうのではなからうか。

たしかに、表現の滑稽性を全く指摘しない江戸人の注釈は、現代の文学観からすればもの足りないものであるが、しかし教訓の匂いに対する敏感さという点は、江戸人の感覚に学ぶべきところがあるのではないか。これらの章段において、内海『評釈』のように、教訓は軽い付け足し程度で、滑稽こそがその主題だと言ってしまうのは、誤りだと思ふ。本当はむしろその逆で、やはり教訓が話の基盤として隠然と存在し、その上に滑稽が繰り広げられていると見

るべきだろう。そして、それは江戸以前の人々が何事かを真面目に語り、あるいは書こうとする際の、基本的な「構え」でもあった。

最後に念のために言うが、私はこれらの段は教訓として読むべきであり、滑稽ではないと言いたいのではない。教訓と滑稽はいわば「体」と「用」の構造であり、相矛盾するものではない。両者は一体なのである。表面的には「用」の面のみが見えているわけであるが、読む者の知識・年齢・氣質などに応じて、いつでも「体」が顔を出せるような仕組み——説教ではこれを対機説法という——になっているのではないかと言いたいのだ。であるから、あまりに教訓を毛嫌いし、それに「ヘキエキ」してしまっているのは、徒然草の本質をも見誤りかねないのではないか、と思うのである。